

合成語におけるステレオタイプの役割

— 一日仏語の対照言語学的視点からの研究 —

The Role of Stereotypicality in Compound Words

— A study from a contrastive point of view between
Japanese and French —

高 田 晴 夫
TAKADA Hareo

ABSTRACT

This paper shows a few types of compound words in which we can recognize the existence of stereotypicality and proposes a hypothesis that this semantic characteristic can possibly contribute to the conceptualization of meaning in these types of words in Japanese as well as in French.

Key words : 合成語、ステレオタイプ、概念化

0. はじめに

ステレオタイプに係わる合成語の語形成法には様々なものがある。たとえば、命名者が人間や事物の行動や働きの一つをステレオタイプのにとらえ、これらを動詞的述語由来の合成法により命名する語形成法、人間や生物や物を、その形状の一つをステレオタイプのにとらえ、2つの名詞の併置により命名する語形成法、さらに人間や物をめぐって発せられる発話の一つ（命令文が多い）をステレオタイプのにとらえ脱ディスクリール化と呼ばれる方法により命名する語形成法が存在している。本稿においては、これら両言語に共通に存在している語形成法においてステレオタイプがどのように現れているのか、また、どのような役割を果たしているかを考察するのが目的である。

1. 合成語とステレオタイプ

本稿で研究対象とする「合成語」にはどのような範囲のものが含まれるのか、また、「ス

「ステレオタイプ」をどのような意味で用いるのかをまず明確にしておく。

1.1. 研究対象となる合成語

本稿において、以下のようなタイプの合成語だけに限定し、その他の合成語は取り上げない。

- i) 動詞的述語を含む合成語（たとえば *pousse au crime*〈安酒、ブランデー〉、*tord-boyaux*〈強い安酒〉）
 - ii) 2つの名詞の併置からなる合成語（たとえば、*poisson-chat*〈なまず〉）
 - iii) 命令文の形をもつ紋切り型表現由来の合成語（たとえば、*marie-couche-toi-là*〈あばずれ女〉）
- （以上取り上げる順）

1.2. ステレオタイプとは何か

本稿で用いられるステレオタイプについて、基本的な意味をおさえておく。初山（2010：25）によればステレオタイプは次のように定義される。

ステレオタイプとは、あるカテゴリーのメンバー全般に関して、十分な根拠なしにある特徴を持っていると広く信じられてはいるが、実際にそのような特徴を持っているのは、カテゴリーのメンバーの一部であるという場合に、そのような特徴の一群のメンバーのことである。

ここでは「メンバー」ということばが使われており、著者がとり挙げている例は、「今の若者」や「サラリーマン教師」といった表現なので「メンバー」とは人間を指すようであるが、本稿では人間ばかりではなくモノも指すことにする。

シャルロット・シャピラ（1999）に従って、ステレオタイプを、さらに以下のように観念的ステレオタイプと言語的ステレオタイプに分ける。

観念的ステレオタイプは言語共同体の中に、信念、確信、固定観念、偏見、迷信などを固定する。…これらのいくつかが言語的ステレオタイプとして固定化される。

氏によれば、この二つの区別は、以下の通りになされる。まず、ヨーロッパの多くの国で、スコットランド人は吝嗇であると言う信念が広まっており、フランスにおいてもそうである。この信念が観念レベルに留まっているのならば、これは観念的ステレオタイプで

ある。少なくともフランスにおいては、観念レベルに留まっているので、これは観念的ステレオタイプである。

ところが、これに対してフランスでは、ポーランド人は大酒飲みであるという信念が広まっているが、スコットランド人の場合とは反対に、ポーランド人についてのこの信念は *soûl comme un Polonais* <ポーランド人のように酔っている> という強調表現として固定化しているので、これは言語的ステレオタイプと呼ぶ。しかし、スコットランド人については *soûl comme un Ecosais* <スコットランド人のように酔っている> という凝結表現は存在しないので、観念的ステレオタイプに留まっている。以上が観念的ステレオタイプと言語的ステレオタイプの区別についてのシャピラの説明である。

本稿で扱う合成語において分析するステレオタイプは、上でシャピラが観念的ステレオタイプから明確に区別した言語的ステレオタイプで、言語的に固定されたステレオタイプだけである¹。本稿においては、言語的ステレオタイプだけを取り上げる。

さらに、ステレオタイプと紛らわしいプロトタイプとの区別について触れておく。プロトタイプは、典型性によりまとめあげられるカテゴリー化のことであるのに対して、ステレオタイプは根拠のないあるいは間違った特徴によりまとめあげられるカテゴリー化のことである。たとえば、鳥という言語記号は、<羽根で空を飛ぶ>とか<羽毛が生えている>とか<くちばしがある>などの特徴により、動物の一類をまとめあげており、このような条件をすべて備えている大多数のメンバー（たとえば、雀、鳩、からすなど）はもちろんのこと、そのような典型性をすべてもっていない、いわば典型性が低いメンバー（鶏、ペンギン、駝鳥）もまとめあげているカテゴリー化である。これに対してステレオタイプは、ある人や物の集団の一部のメンバーにしか当てはまらない特徴を、あたかもすべてのメンバーに当てはまるがごとくとらえて、まさにその特徴を用いて、その集団をカテゴリー化することである。たとえば、ポーランド人の全員が大酒飲みであるわけではないのに、*soûl comme un Polonais* <ポーランド人のように酔っている> という捉え方は、ポーランド人に対するステレオタイプに基づくカテゴリー化である。

2. 分析

以下の分析では、ステレオタイプが、i) 動詞的述語を含む合成語 ii) 2つの名詞を併置する合成語 iii) 命令文の形をもつ紋切り型表現由来の合成語に現れるステレオタイプと語形成におけるその役割を考察する。それぞれのタイプの合成語において、どのような意味においてステレオタイプが関与していると言えるのか、また、それらの形成においてそれはどのような役割を果たしているのか、などの問題に取り組む。

2. 1. 動詞的述語を含む合成語タイプ

動詞的述語を含む合成語タイプとステレオタイプについてD.コルバン（1997）は次のように述べている。

これらの単位はすべて特徴づけの解釈を持っており、ステレオタイプのな行動特徴あるいは心理的特徴の一つにより生物（boit-sans-soif<大酒飲み>）を特徴づけたり、人間におよぼすステレオタイプの影響への言及により物体や実体（pousse au crime<安酒、ブランデー>）を特徴づけるのに役に立つ。たしかに、特徴づけの解釈は統辞的に変則的な表現に対して禁止されているわけではない。casse-pieds<うるさい人>、casse-cou<向こう見ずな人>、rabat-joie<悩みの種>、tord-boyaux<強い安酒>はそれが指す生物や物のステレオタイプのな特徴を際立たせる。

ここから分かることは、フランス語の動詞的述語を含む合成語には統辞的規則に合致した合成語タイプ（boit-sans-soif、pousse au crime）と合致しない<変則的>なタイプ（casse-pieds、casse-cou、rabat-joie、tord-boyaux）があること、いずれのタイプも人や物の命名に用いられること、また、それらが構造の違いを超えて、人の行動特徴や心理的特徴のステレオタイプや人に対して及ぼす物の特徴のステレオタイプと結びつく場合が少なくないことであろう。それでは、一つ一つの合成語において、ステレオタイプを認めることができる理由は何なのだろうか。たとえば、上記引用に挙げられているboit-sans-soifにおいては、大酒飲みが必ずしも水を飲まずに酒を飲む者ばかりではないのでステレオタイプがあると言える。pousse au crimeにおいては、安い酒やブランデーが、これを飲む者をして常に犯罪に向わせるわけでもないのでステレオタイプがあると言える。同様に、casse-piedsにおいては、うるさい人が必ずしも足の骨を折る人ばかりではないからステレオタイプがあると言える。さらにcasse-couにおいては、向こう見ずな人が必ずしも首の骨を折る人ばかりではないからステレオタイプがあると言える。rabat-joieにおいては、悩みの種が必ずしも喜びに水をさすものばかりではないからステレオタイプがあると言える。tord-boyauxにおいては、強い安酒が必ずしもこれをの飲む者の胃腸をねじらせるわけではないからステレオタイプがあると言える。これらすべてにおいて、ステレオタイプを観察することができる²。これらのステレオタイプが動詞的述語を含む合成語タイプで実現されなければならない必然性はない。しかし、この種の合成語の語形成法は、物や人の典型的な働きの視点から命名することができ、また、述語を含んでいるので構成要素の意味から全体の意味が予測しやすいということが、この語形成法の手段に安定性を与えている。さらに、動詞的述語を基盤とする合成語タイプの語形成法は、言語レベルという点

において、民衆レベルの表現力³を持っているので、上で分析したステレオタイプの意味的特徴と親和性があると考えられることができる。以上の理由から、ステレオタイプは、この種の合成語タイプと緊密に結びつき、その意味の概念化に貢献できるという働きを持っていると言うことができる。

一方、日本語はどうであろうか。日本語も、フランス語と同様に動詞的述語を含む合成語は生産的である⁴。日本語は、フランス語に比べて、この種の合成語タイプにおいては、ステレオタイプを含むものはそれほど多くはないが、それでも、たとえば、デジタル『大辞泉』(2010)には次のようなものが挙げられている。

- 1) 穀潰しく<定職もなくぶらぶらと遊び暮らす者>
- 2) 鬼殺しく<辛くて強い酒>
- 3) 神隠しく<子供、娘などが突然いなくなる。神や天狗の仕業と考えられていた。>

穀潰しにおいては、定職もなくぶらぶらと遊び暮らす者のすべてが、穀(=生活)を潰している(=破滅させている)わけではない。鬼殺しにおいては、辛くて強い酒のすべてが、鬼(=酒の強い人の譬え)を酔い潰したり、鬼(=恐ろしい人の異名か。)のように殺しに走るわけではない。また、神隠しにおいては、そのように命名される事件のすべてが、昔はともかく、現代では、神や天狗の仕業と信じられているわけではない。従って、いずれの場合も、ステレオタイプを認めることができる。

このような動詞的述語を含む合成語タイプが、フランス語と同様に、酒の命名手段として用いられることがあることは、大変興味深い。辞書に登録されていない例であるが、このような合成語タイプによる命名方法により作られた商品名の例をここに紹介しておく。それは「かめのぞき」(甕覗)という名前の新潟の酒である。「かめのぞき」は、「かめ」が酒壺を表し、「のぞき」は身を屈める行為を表している動詞的述語であることは明白である。この命名は、「甕(かめ)」の蓋をあけて、身がかがめながら酒がまだどの位残っているか中を覗(のぞ)き込んでいる酒飲みのイメージを生き生きと喚起させてくれる。すべての酒飲みが、そうするわけではないから、このイメージは典型的にステレオタイプである。一方、これと平行してフランスのワインにchasse-spleen<憂いばらし>という銘柄があることは大変興味深い。ワインをいつも憂いを払うために飲む者にとっては、将に、“壺にはまった”命名かもしれないが、すべてのワインが憂いを払うために消費するわけではないので、ここにもステレオタイプを認めることができる。

2.2.2つの名詞を併置する合成語タイプ

2つの名詞を併置して合成語をつくる方法は多くの言語が利用している⁵。フランス語

も例外ではない。フランス語は、次の3つの下位タイプを区別することができる⁶。

- (1) 修飾型⁷ (poisson-chat<なまず>)
- (2) 前置詞省略型 (timbre-poste<切手>)
- (3) 兼任型 (chirurgien-dentiste<歯科・外科医>)

ここで問題となる合成語のタイプは(1)の修飾型のみである。さて、poisson-chat<なまず>には、明らかに、比喩を媒介とするステレオタイプがある。なまずが身近な動物の猫と顔の形状が似ているという特徴は、フランス人が持っているステレオタイプであり、poisson-chatはそれに基づくカテゴリー化の結果であると説明できる。この特徴がステレオタイプであると言えるのは、すべての言語が、この特徴を利用しているわけではないからである⁸。

同様に、コルバン(1997)は、homme-grenouille<フロッグマン、潜水夫>の形成に係わるステレオタイプについて以下のように述べている。

homme-grenouilleにおいて、grenouilleは、hommeが指す範疇を下位範疇化している。homme<人間>の範疇の中で、homme-grenouilleは、その出現がgrenouille<蛙>の範疇のいくつかのステレオタイプ的な特徴に帰せられる事実によって定義されるhommeの下位範疇を命名しているのである。

メタフォールに基盤をもつので、これをメタフォールのステレオタイプと呼ぶことができる⁹。このようなステレオタイプは、以下のような合成語にも確認できる。

- 4) oiseau-mouche<蜂鳥>
- 5) papier-monnaie<紙幣>
- 6) poisson-lune<マンボウ>

他方、日本語はどうであろうか。日本語においては、以下の例にメタフォールのステレオタイプが確認できる。

- 7) お化けカボチャ
- 8) 鬼ばばあ
- 9) 石頭

平均的な大きさよりもはるかに大きいものを目の前にして、お化けのように大きいと思うのは、日本人のステレオタイプである。従って、お化けカボチャはカボチャの巨大さという特徴に基づいてカテゴリー化した合成語である。同様に、怖い人間を見て、鬼のようだと思うのも日本人のステレオタイプである。また、頭が固い人、考え方に柔軟性がない人を見て、頭が石のように固いと思うのも日本人のステレオタイプである。これらはすべて、直喩的メタフォールを媒介とする合成語であり、上であげたフランス語と同じ原理に基づく造語である。

以上フランス語と日本語のメタフォールのステレオタイプの合成語を見て来たが、これらのステレオタイプが2つの名詞を併置する合成語タイプで実現されなければならない必然性はない。しかし、この種の合成語タイプは、命名されるあたらしい動物や物と日常的な動物や物との間に存在する姿、働き、形などの類似性に基づいて容易に利用できる。さらに、2つの名詞を併置する合成語タイプは、語形成の言語レベルという点において、民衆レベルの表現力¹⁰を持っているので、上で分析したステレオタイプの意味的特徴と親和性があると考えられることができる。以上の理由から、ステレオタイプは、この種の合成語タイプと緊密に結びつき、その意味の概念化に貢献できるという働きを持っていると言うことができる。

2.3. 命令文の形をもつ紋切り型表現由来の合成語

本節では、命令文の形をもつ紋切り型表現由来の合成語とステレオタイプの関係について考える。以下コルバン (1997, 2000) のmarie-couche-toi-là <あばずれ女>とS.モスバ (2006) のsuivez-moi jeune homme <(婦人用帽子)の飾りリボン>の例を考察する。

2.3.1. コルバンのmarie-couche-toi-là <あばずれ女>の分析

コルバンは、このような語彙的単位の形成を脱ディスクール化という概念により説明する。脱ディスクール化をコルバンは以下のように定義している。

La dédiscursivation consiste à construire une unité lexicale à partir d'une séquence formulaire, réaliste ou non.¹¹

「脱ディスクール化とは、それが現実的要素連続であろうと非現実的要素連続であろうと、紋切り型表現から語彙的単位を構築することである。」(6.2.2節)

コルバンは脱ディスクール化についてさらに次のように述べている。

... la dédiscursivation, opération qui construit des unités lexicales en

reproduisant la forme d' énoncés réels ou fictifs associés ou associables de façon privilégiée à leurs référents.¹²

「指向対象に優先的に結びついているか、結びつけられうる現実的あるいは仮想的発話形式を再現することにより語彙的単位を創造する操作としての脱ディスクール化」(6.4.節)

以上のコルバンの二つの引用から、脱ディスクール化とはディスクールの中から発話や発話の一部を取り出し、それを語彙的単位にする操作であることがわかる。ここでは、ステレオタイプがどこにあるかという観点から、特に次の二点に注目することができる。まず第一点目は、コルバンが例として取り上げているmarie-couche-toi-là <あばずれ女>は、その起源が、現実的であるにせよ仮想的であるにせよ、紋切り型表現 (séquence formulaire) に由来する以上、反復的に使われるという点において、ステレオタイプ的である。第二点目は、コルバンによれば、この表現の虚構的な性質が、キリスト教社会では女性の典型的なファースト・ネームであるところのMarieが使用されている点に見て取ることができる¹³。実際に、Marieを他の多くのファースト・ネームを排除するかたちで選択している点は、ステレオタイプ的である。なぜなら、すべての<あばずれ女>が、Marieという名前をもっているわけではないからである。

2. 3. 2. S.モスバ (2006) のsuivez-moi jeune homme<(婦人用帽子)の飾りリボン>の分析

次にS.モスバのステレオタイプについての分析を紹介する。彼がとりあげている例はsuivez-moi jeune homme<(婦人用帽子)の飾りリボン>である。氏によればステレオタイプは造語主体の推論の認知能力との関係において介入してくる。氏はこれを推論的ステロタイプと呼んでいる。その造語プロセスは次の通りである。まず、帽子のリボンを命名する主体は、リボンのゆらゆらと揺れるイメージと若い青年を誘惑する女の手のしぐさの社会的にコード化されたイメージの間に存在する類似性に注目する。次に、命名主体は比喩的類似に基づいて主観的に推論する<青年よ、私についておいで>という発話を含むひとつの言説を心の中に聞く。この言説が、現実のものであろうと虚構のものであろうと構わない。さらに、命名主体は、この言説から上記の発話を取り出し、これを脱偶発化 (=décontingifier¹⁴) し、実詞に再カテゴリー化する。推論的ステレオタイプは造語プロセスにおいて重要な役割を果たす。

2. 3. 3. 「見てくれ」と「ほっちゃれ」の分析

日本語においては、命令文の形をもつ紋切り型表現由来の合成語は極めて少ない¹⁵。日

本語の命令文が合成語になることは、フランス語に比べるとはるかに少ない¹⁶。筆者は、残念ながら「見てくれ」と「ほっちゃれ」しか知らない。前者は<顔>のことで、

10) この少女は見てくれがよい。

などのように使う。一方、「ほっちゃれ」は筆者の出身地である北海道の方言で、<産卵した後のしゃけ>を指す。川を遡り産卵した後のしゃけは、脂が落ちあまり美味しくないことから「ほっちゃれ」(=放っておけ)と言ったことから生まれたと言い伝えられている。「見てくれ」や「ほっちゃれ」は上で説明したmarie-couche-toi-là <あばずれ女> や suivez-moi jeune homme<(婦人用帽子)の飾りリボン>と同じである。ただし、「見てくれ」は、誰から誰へ向って発せられた命令文とみなしたらよいのか分からない。仮に、「私」から「私を見ている人間」に向って発した文であると考えれば、suivez-moi jeune hommeに近い。しかしsuivez-moi jeune hommeは擬人法に基づくが、「見てくれ」はそうではないという大きな違いがある。一方、「見てくれ」を「私」から「私が話しかけている人間」に向って発せられた文と考えれば、marie-couche-toi-làに近いとも言える。とはいえ「見てくれ」とmarie-couche-toi-làを同種の合成語とみなすことはできない。なぜならmarie-couche-toi-làがこの命令を向けられた人を明確に指すのに対して、「見てくれ」は「私の顔」を指す場合もあれば、「あなたの顔」を指す場合もあるし、まったく「第三者の顔」を指す場合もあるからである。

一方「ほっちゃれ」については、suivez-moi jeune hommeやmarie-couche-toi-làとはまったく異なる。なぜなら、これは、しゃけが擬人的にそう言ってるのでも、しゃけに向って誰かがそう言っているのでも、いずれでもなく、しゃけと係わろうとしている人に向って「私」や他の人がそう言っていると考えられるからである。産卵後脂が落ちあまり美味しくないしゃけのすべてが捨てられるわけではなく、これを調理して食する者もいるし、レストランのメニューにのることもあるので、明らかに、ステレオタイプを認めることができる。

3. おわりに

本稿においては、3つの合成語タイプ、すなわち i) 動詞的述語を含む合成語 ii) 2つの名詞を併置する合成語 iii) 命令文の形をもつ紋切り型表現由来の合成語のような語形成法におけるステレオタイプの役割を考察した。これらすべての合成語タイプにおいて、両言語を通して、経験世界における人や物に対して我々が抱いてしまうステレオタイプの実現手段となっていることを確認することにより、このような合成語の語形成法において、ステレオタイプが果たす役割は、その意味の概念化に貢献できるという点であることを示

した。本稿では、ステレオタイプが、言語系統的に異なる二つの言語において、同じ合成語タイプ毎に、程度に多少の差こそあれ、共通の働きがあることを示すことができたことは、将来、全ての言語に普遍的に観察される凝結現象の意味的プロセスを解明する上で役に立つだろう。これは筆者の今後の課題として擱筆とする。

注

- 1 このことは、必ずしも、言語学では観念的ステレオタイプを扱わないということの意味しない。論拠立ての理論に基づく談話分析においては、しばしば観念的ステレオタイプを扱うことは言うまでもない。
- 2 このような構造を持つ合成語のすべてが、ステレオタイプを含むと考えることは間違いである。
- 3 A.ダルメステール (1874) を参照。
- 4 但し、日本語は「名詞+動詞の連用形」となる。構成要素の語順は、日本語の基本語順に一致する。フランス語の構成要素の語順は、フランス語の基本語順に一致する。動詞的構成要素の由来については、三人称単数説、命令形説、語幹説がある。現代の多くの言語学者は語幹説をとる。さらに、日本語は右側主要部言語であり、また、動詞構成要素の連用形名詞が動作的な意味で解釈される可能性が高いから、合成語全体の意味が、動作的意味を持つものの割合が高い。これに対して、フランス語は、左側主要部言語ではあるものの、動詞語幹名詞 (今田 (1988)) を作る造語力、すなわち、動詞から接尾辞を使わずに動作名詞を作る造語力は、俗語を除くと、弱いから、動作的な意味を持つものの割合が低い。フランス語のこの種の合成語は、物や人を表すと解釈されやすい。つまり、外心的合成語と理解されやすい。これはロマンス系言語に共通している特徴のようであるが、筆者は、これはSVOという基本語順と深い関係があると考えている。合成語の意味主要部はVにあるのではなく、言語化されていないSの位置にあると解釈されるからではないかと考えている。高田(2008)の第4部を参照のこと。
- 5 P.J.L.アルノー (2004) を参照。
- 6 高田 (1994) 参照。但し、*maitre cuisinier* <コック長> を入れれば4つの下位タイプになるが、このような第一名詞が第二名詞を修飾するものは稀であるので除外する。
- 7 高田 (1989) を参照。ダルメステール (1874)、ニロップ (1914) は同格型としている。
- 8 スペイン語では*barbo*という。
- 9 バンヴェニスト (1966) を参照。
- 10 A.ダルメステール (1874) を参照。
- 11 2000, Extraits prépubliés de *Le lexique construit*, (inédit, non paginé)
- 12 同上
- 13 2000, Extraits prépubliés de *Le lexique construit*, (inédit, non paginé)
- 14 MOSBAH, Saïd (2003 :151-173)
- 15 命令文の形をもつ紋切り型表現由来の合成語は少ないが、「連体修飾節+名詞」型の合成語は非常に生産的である。たとえば、「港が見える丘公園」。
- 16 フランス語の命令文の形をもつ紋切り型表現由来の合成語の生産性については、ダルメステール (1874) を参照のこと。

参考文献

- ARNAUD, Pierre J.L., 2004, Le Nom Composé Données sur Seize Langues, Presse Universitaire de Lyon
- BENVENISTE, Emile, 1966, “Formes nouvelles de la composition nominale” ,B.S.L.P., t. LXI, fasc., p82-95
- CORBIN, Danielle, 1997, “Locutions, composés, unités polylexématiques : lexicalisation et mode de construction” , in La locution entre langue et usages, pp.53-101
- CORBIN, Danielle, 2000, Extraits prépubliés de Le lexique construit, (inédit, non paginé)
- DARMESTETER, Arsène, 1874, Traité de la formation des mots composés, Champion
- IMADA, Yoshinobu, 1988, “Gendai Nihongo ni okeru Doushi-Gokan-Meishi ni tsuite” , Journal of University of Hiroshima, Faculty of Humanities, vol 47
- MOMIYAMA, Yosuke, 2010, Ninchi-Gengogaku Nyuumon, Kenkyuusha
- MOSBAH, Saïd, 2003, “La stéréotypie et la structuration du sens : cas de la polysémie et de la polylexicalité” , in Syntaxique et Sémantique, p151-173, Presse Universitaire de Caen
- MOSBAH, Saïd, 2006, “La stéréotypie dans les séquences figées : entre transparence et opacité”, in Composition syntaxique et figement lexical, p245-260, Presse Universitaire de Caen
- NYROP, Christopher, 1914, Grammaire Historique de la Langue Française, Slatkine Reprints, Vol III
- SCHAPIRA, Charlotte, 1999, Les stéréotypes en français : proverbes et autres formules, Ophrys
- TAKADA Hareo, 1989, “Gouseigo-kousei-gairon ni mirareru Gousei-go no Gainen o Megutte—Kyoujiteki Goika no Shiten kara—”, Journal of University of Niigata, Faculty of Humanities, vol 74
- TAKADA Hareo, 1994, “Gokouseihou no Gengo-isou to Imi-kouka ni kansuru Jyakkan no Kousatsu” , Journal of University of Niigata, Faculty of Humanities, vol 85
- TAKADA Hareo, 2008, Le Mot Composé, Niigata University Scholar Series Vol. 8